朝日新聞　第3種郵便物認可

緊急時出産対応 救急救命士学ぶ

大規模災害時など想定 山梨大で26人

救急救命士が妊婦の緊急搬送時の対応を学ぶトレーニングプログラムが11、12両日、山梨大医学部で開かれ、県内の救急救命士計26人が参加した。搬送中の救急車や自宅での出産に備える救急救命士の訓練は、全国的に進められ、県内では今回が初めてという。

救急車で母子守る

米国で開発された「産科における1次救命処置のトレーニングコース」を実施した。大規模災害の発生時を含め、病院外での妊婦の緊急事態を想定したプログラムだ。日本では2011年に導入され、800人以上が受講したという。

訓練では、まず助産師が分娩（ぶんべん）時の対応方法を説明。続いて救急車内で赤ちゃんの人形を使い、新生児や母体の安全を守る実地の動作や、容体が急変した場合の蘇生方法を学んだ。

参加者は「救急車のような狭い空間では、赤ちゃんを寝かせる場所の確保が難しい」「容体が悪化したら、応援が来るまでの時間をどうつなぐか」などと頭を悩ませていた。

金沢大が2010年に実施した全国の消防本部へのアンケートでは、病院外での分娩が年間734件あったという。

主催した山梨大医学部の平田修司教授は「救急救命士にも知識を深めてもらい、病院と救急隊の協力を密にすることで、県内の産科医療をより安全なものにしたい」と話した。

救急車内で出産への対応を訓練する参加者

地元「街見てもらうこと必要」

た。出席者は「ブドウやワインと同時に、街を見てもらうことが必要だ」「地域資